私の行きつけ

新・赤ちょうちん

4

洋食居酒屋日実子

不動前駅徒歩1分

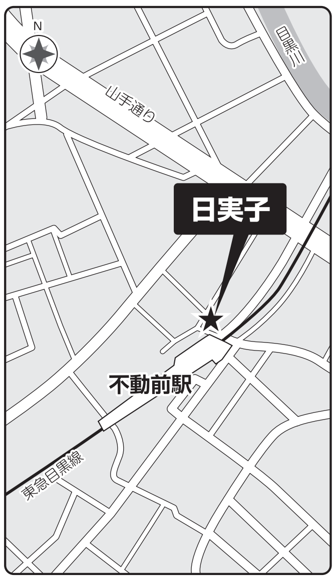
【目黒・書記・奥山明通信員】東急目黒線の不動前駅から徒歩1分、大きな窓から日の光が差し込んで温かい雰囲気の「洋食居酒屋日実子」。

店内は白を基調とした落ち着いた雰囲気で、広めの茶色いテーブルはゆったりしててリラックスできる席です。壁に書かれた感謝の言葉が店主の優しさを表わしています。

おすすめは店主出身の北海道小樽市場直送のお刺身盛り合わせ。厳選された季節の魚介類は鮮度抜群。どのお魚も脂がのって美味しいです。

ありがとう
今日も
出逢ってくれた
あなたと共に

壁に書かれた感謝の言葉



随所に溢れるおもてなし

小樽直送の刺し盛り

夜は居酒屋ですが、日昼はランチもやっています。頂いたのはジンギスカン定食に開きホッケと麺の上にサラダがのったラーメンサラダ。北海道といえばジンギスカン、お肉が柔らかくジューシーで、独特のクセや臭さもなくついつい食べ過ぎてしまう程。食感も最高で、脂ののりのよいホッケも北海道産。

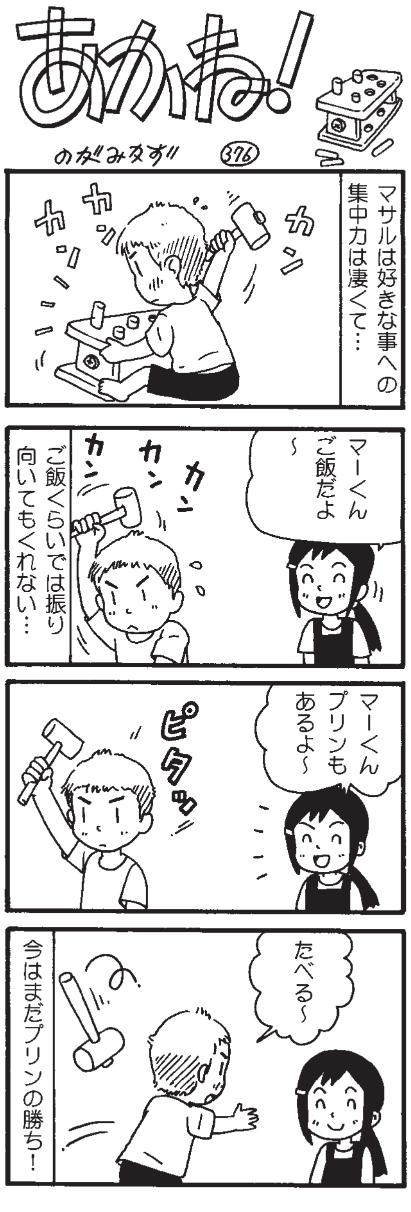
ランチの時間帯のメンチカツ定食はドリンク付きで850円。メンチカツ大きいっ！食べ応えがあります。アイスコーヒーは大きなグラスにたっぷり。ゆっくりしたいときには嬉しいサービスです。

テーブル上の楕円形のランチョンマットや爪楊枝の入れものが可愛いのです。随所におもてなしの心が感じられます。こじんまりしていて、ローカルなゆとりを感じるお店。マニュアル化した生活にはない、人情味を肌で感じられる良い雰囲気です。ご馳走さまでした。

《メニュー》

生ビール	520円
レモンサワー	500円
刺身盛り合わせ	1400円〜
生ハムサラダ	500円
とり皮餃子	450円
とりももステーキ	650円

営業時間　11時半〜14時（月〜金）、17時〜23時（月〜土）
定休　日・祝・祝前日
品川区西五反田4―32―15―1階
☎6431―8989



さまざま

転機

ハワイ出身のジャック・ジョンソンは幼少期から父にサーフィンを教わり、高校時代には将来を嘱望されるプロサーファーに。

しかし、17歳の時にサーフィン中の事故で、後頭部に大ケガを負ってしまう。回復するまでの数カ月、以前から趣味だったギターの練習に没頭。その後大学在学中に友人と作った映像作品に挿入した自作音楽が注目を集め、今では絶大な人気を誇る、世界的シンガーソングライターとなった。

忘れえぬこと

7人兄弟が夢中で食べた

武骨な父のカレー

管工事　望月哲司

夏の時期になると「カレーライス」の忘れられない思い出がよみがえってきます。

昔、戦中、戦後は食料難でいつも兄弟と腹をすかせていたのを覚えています。食料は配給で、今のようにお金さえあれば何でも自由に買える時代ではありませんでした。

私は両親と兄弟7人の9人家族。父親が石屋だったので農家に仕事に行った時などは、お金の替わりに米、芋、野菜、みかん、柿などをもらって来ました。今日は何をもらって帰ってくるのか、それが楽しみでした。

外食経験のない私たちがみやげの他に楽しみにしていたのは、時折作る父親の料理でした。武骨な職人の手で作る料理に、母親の料理とはまた一味違ってわくわくしたのを思い出します。

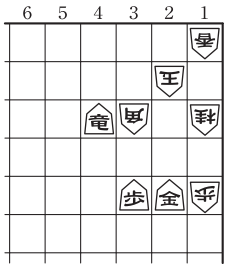
そんなある年の夏の夜に、初めてカレーライスを父親が作ってくれました。衝撃的でした。なにせ生まれて初めて食べたカレーの味。こんなにうまいものかと驚きました。

肉は入っていなかったと思いますが、刺激的な匂い。何かの缶詰と人参や野菜がうまく黄色いカレー粉の入った汁と絡みあい、米と麦めしにかかったカレーライスを兄弟皆で驚きながら夢中で食べました。武骨で無口、職人らしい顔立ちのおやじが、皆の様子を見てニヤリとしていました。

この時の光景が目と鼻と口とに焼き付いています。おやじと家族の思い出とともに。

夏が来るとバテて体調を崩す人が多いようだけど、夏はやっぱり「カレー」でしょう。今でも私はカレーを食べて夏バテ知らずですよ。（調布）

詰将棋



チョット一服（997）

健康保険組合連合会（健保連）が花粉症薬の一部を保険外にするとの政策提言を公表した。健保連は薬剤費の削減が目的のようだが、保険外になったときには、花粉症で医療機関にかかる人が減り、直接、市販の花粉症薬を求める人が増えるのではないか。

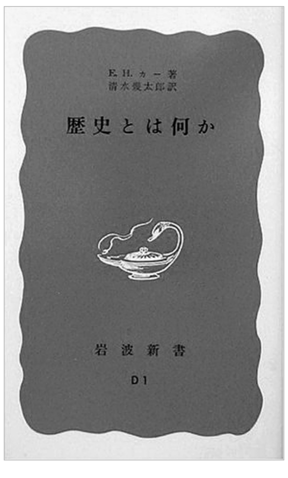
自分は毎年、花粉症で悩まされているのだが、今年の春に新しい薬を処方された時は症状が軽減しないので、別の薬に替えてもらった。花粉症と一口に言っても、人によって症状の出方は様々で、おまけに症状が出る間は薬の服用を続けねばならない。処方にあたって医師の診断は欠かせないのではないか。

本　ほん

歴史とは何か

E.H.カー 著
清水幾太郎 訳

現在と過去の対話から未来を考える



E.H.カー著
清水幾太郎訳
歴史とは何か
岩波新書
D1

【本部・年森隆広記】「歴史とは…現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」。

…清水幾太郎の訳によるイギリスの歴史家、エドワード・ハレット・カーの講演集である本書は、1962年に出版された岩波新書（ナンバーD1）の古典です。

1892年生まれのカーは外交官から歴史学者となった人。講演はケンブリッジ大学・BBC放送で行なわれました。

カーは、「歴史家とその事実との間の相互作用という相互的過程―現在と過去との対話―は抽象的な孤立した個人と個人との間の対話ではなく、今日の社会と昨日の社会との間の対話なのです。」と、さまざまな史観（歴史の見方）の検討・論争を展開します。

また、エンゲルスの手紙から「歴史とは最も残忍な女神…死骸の山を越えて勝利の戦車を引いていく」を引用して、「われわれは社会のなかで…歴史の中で生まれている」と科学の目をひらくことを示しています。

このカーの講演集を清水幾太郎に翻訳するように促したのは、「君たちはどう生きるか」の著者である吉野源三郎です。

戦争を経て歴史を学ぼうとする当時の息吹も感じます。

講演自体が第二次世界大戦直後、ヒットラーやマッカーサー上院議員（米）などの同時代人や19世紀の思想家たち、マルクスやヘーゲルが登場します。

本書は私たち自身が歴史を学び、歴史から現在を見ること、未来を考えることの大切さを教えてくれます。

（岩波新書・本体860円＋税）